

【論文】

教育分野におけるトラウマインフォームドケアの概念と展開

なかむら ゆう ぎ きむら ゆ り たきのようぞう いわきり まさひろ いちたにひろなが
中村有吾*・木村有里*・瀧野揚三**・岩切昌宏**・一谷紘永***

*学校危機メンタルサポートセンター ト라우マ心理相談室相談員

**学校危機メンタルサポートセンター

***大阪教育大学附属池田高校 スクールカウンセラー

近年、米国を中心に普及しつつあるトラウマインフォームドスクールはトラウマインフォームドケアを教育分野に適応したトラウマの悪影響の理解とその軽減を目指すフレームワークである。本稿ではこの概念を本邦に導入することを目的として、概念の内容をまとめ、問題点を検討した。構成要素として「教職員の育成とスーパービジョン」、「神経発達を支援する教育」、「教室の管理」、「方針と手続き」、「規則」、「地域機関との連携」があり、フレームワークはSWPBISが推奨されていた。最後に、導入する際の問題点として、専門家の養成を主に検討を行った。

キーワード：トラウマインフォームドスクール、SWPBIS、バウンスバック、チーム学校

I. はじめに

トラウマインフォームドケア（Trauma-Informed Care:以下 TIC）は、トラウマを抱えた当事者にかかわるあらゆる職員が行うトラウマを念頭に置いたケアであり、米国のメンタルヘルス領域で注目されている概念である[1]。

近年、トラウマに関連する子どもを取り巻く状況の変化を示すデータが報告されている。平成27年度の児童相談所の児童虐待相談件数は103,260件とこれまでで最多の件数となっている[2]。平成26年度の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は188,072件と前年度より2,269件増加している。その中でも心身又は財産に重大な被害が生じるなど重大事態の発生件数は449件と前年度より270件増加している[3]。また、小学4年から中学3年までの間に仲間はずれ・無視・陰口といった精神的苦痛を6回以上与えられた経験をしている生徒が4割強存在していることが分かっている[4]。

このような子どもの置かれた状況を含む社会状況の変化に、文部科学省は「次世代の学校指導体制の在り方について」の中間まとめにおいて、学校体制の整備を提案している[5]。具体的には、児童生徒が安心して教育を受けることができることを目的として学校が多様な専門人材と連携、分担を行うチーム学校と呼ばれる体制を展開することである。今後、チーム学校がどのように展開されるか明確ではないが、多様な子どものニーズに合わせた対応がとれる学校側の体制作りが進んでいくものと考えられる。

こうした中で、学校がトラウマを事前に防ぎ、トラウマの理解や回復を促進する環境を想定した体制作りへのニーズは高まっていくものと思われる。そこで本稿は、学校にTICの概念を導入していくうえで理論的基盤を構築するために、米国における教育分野のTIC

の概念や取り組みを紹介し、日本に導入する際の問題点を検討する。

Ⅱ. TIC とは

TIC は、トラウマが様々な方面に及ぼす悪影響への理解とその悪影響の軽減を目指すサービスを表すために 1990 年代に作られた用語である。米国では、特にこの 5 年間に於いて教育、社会福祉、医療、児童福祉など様々な領域への導入が試みられている[6]。

1. トラウマインフォームドアプローチの想定と重要原則

アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス (Substance Abuse and Mental Health Service: 以下 SAMHSA) が提唱しているトラウマインフォームドアプローチでは、4 つの想定と 6 の重要原則が掲げられている[7]。

想定第一はトラウマの蔓延と影響を理解することである (Realize)。第二はクライアント、家族、職員、その他の組織関係者がトラウマの兆候や症状に気づくことである (Recognize)。第三はトラウマの知識を方針、手続き、実践に組み込み対応することである (Respond)。第四は再受傷を防ぐこと (Resist re-traumatization) である。これらの想定を合わせて「4 つの “R’s”」として表すこともある。

次に 6 つの重要原則は、「安全」、「信頼性と透明性」、「ピアサポート」、「協働と相互性」、「エンパワーメント、発言と選択」、「文化、歴史、ジェンダーの問題」にまとめられる。

このようなトラウマインフォームドな考え方を「行政や指導者」、「方針」、「物理的環境」、「エンゲージメントと関与」、「分野の枠を超えた協働」、「スクリーニング、アセスメント、治療サービス」、「訓練と労働力開発」、「経過の監視と質の保証」、「資金調達」、「評価」といった 10 に及ぶ領域に導入していくことで、組織的にトラウマに対する態度を変化させていく。

TIC はトラウマに特化した介入 (trauma-specific intervention : 以下 TSI) とは異なる。両者ともにトラウマが及ぼす影響に対処し、回復を促進させていくという目的では一致するが、対象者のレベルが異なっている[8]。TSI はトラウマサバイバーであるクライアントのニーズに即し個人レベルに合わせた形で介入を行う。一方、TIC は、職員、クライアント、家族を含む組織や地域といった大きな枠組みに対して、トラウマサバイバーの行動の理解を促すような情報を提供し、回復促進や予防教育を促進していくことが重視される。

2. 教育分野への TIC の拡大

教育への TIC の導入は近年拡大してきており[9][10][11]、米国においては少なくとも 17 の州で実施されている[12]。米国以外では、特にオーストラリアのいくつかの団体によってマニュアルが作成されており[11][13]、Web からダウンロードできるようになっている。米国においては、落ちこぼれをつくらないための初等中等教育法防止法 (No Child Left Behind Act) に代わり、オバマ政権下で可決された教育法であるすべての生徒が成功する法 (Every Student Succeeds Act : 以下 ESSA[14]) において、TIC について直接触れられている条項があり、その重要性が認識されている。そのため、今後、米国において TIC 導入の実施が加速していく可能性が高いと考えられる。効果研究に関しては、教育分野への適応自体の歴史が浅いため研究数は少ないが、TIS を導入することで、退学者数、停学者が大幅に減少したという報告もある[15]。

用語に関しては、教育分野へ TIC を学校に適応することを周囲の者が子どものトラウマ

に対して意識や感受性を高めることを表す“sensitive”を用いて、“Trauma sensitive school [10]”としたり、こういった志向性を表す言葉“informed”を用いて“Trauma Informed school(以下 TIS) [12]”と表現しているようである。先述した ESSA においては“Trauma informed”が用いられているため、本稿では TIS として表記することにする。

3. TIS の定義と構成要素

TIS は、個々の学校が独自の方法で導入するため、同一の内容のものがない。このようなこともあり、TIS の操作的定義はほとんど見られない。TIS にかかわるものが、共通のビジョンを共有することは TIS を導入するうえで必要不可欠であるため、「全児童生徒が安心、受容、支持を感じ、学校全般における学習へのトラウマの影響に対処することが教育理念の中心となる。継続的な探求に焦点をあてた過程は、全児童生徒に必要なチームワーク、連携、創造性、責任の共有を可能にする[10]」と定義を試みているものもある。TIS の構成要素としては、「教職員の育成とスーパービジョン」、「神経発達を支援する教育」、「教室の管理」、「方針と手続き」、「規則」、「地域機関との連携」の 6 つが挙げられている(表 1)[16]。

「教室の管理」の要素に記載されている PBS や SEL は、TIS の中でも頻繁に用いられているフレームワークである。PBS は応用行動分析を基盤に、人間の行動は機能的、予測可能であり、行動は変容可能であるという考え方が前提にある。そして、問題行動を予防し、適切なスキルを教えることに力点を置いている[17]。

SEL は学校を基盤とした豊かな人間関係を育むスキル習得のための効果的なプログラムの確立が目標となるフレームワークである。SEL を構成する基本的なコンピテンスとしては、「自己覚知」「社会的覚知」、「責任ある意思決定」、「セルフマネジメント」、「関係維持のスキル」の 5 つがあり、このフレームワークに基づいて様々なプログラムが開発され、実施されている[18]。

Ⅲ. 教育分野へ TIC が導入された背景

そもそも TIC の考え方が普及した背景には 1990 年代半ばから米国を中心に行われてきた ACE 研究(Adverse childhood experiences study : 逆境の児童期の体験)に端を発している[19]。ACE 研究は、マネジドケア組織であるカイザーパーマネンテ(Kaiser Permanente)とアメリカ疾病予防管理センター(Centers for Disease Control and Prevention)により実施された 17000 人以上を対象にした大規模な疫学調査から始まっている。この中で、トラウマの体験率の高さとトラウマ体験が長期に渡り心身に大きな影響を及ぼすことが明らかにされてきた[20]。最近の米国の報告では、17 歳までに約 3 分の 2 の子どもが少なくとも 1 回以上のトラウマ経験があり、中にはその影響により学習に顕著な障害が生じていることが報告されている[21]。

教育分野へ TIC の導入が進められるようになった背景は、ACE 研究によってトラウマの実態が理解されるようになったこと以外に、次の三点がある[16]。第一は、1990 年代から推進されてきたゼロ・トレランス政策の問題点が浮き彫りになってきたことである。ゼロ・トレランス政策では、校内での行動に関する詳細な罰則を定め、これに違反した場合は速やかに罰を与え、場合によっては停学、退学処分を科すこともある。トラウマなど子どもの置かれた背景を考慮することなく、毅然と厳しい罰を子どもに課し問題のある子を排除することは、結果的に社会からもドロップアウトする子どもたちを増やしてしまうという批判がある[22]。

表 1. TIS の構成要素 (Craig [16] をもとに作成)

構成要素	内容
教職員の養成とスーパービジョン	教職員や学校管理職は、トラウマへの感度を高め、生徒の問題行動に対応するための訓練を受ける。スーパービジョンでは、教職員が生徒と肯定的な関係の維持、共感的疲労や二次外傷を防ぐための支援をする。
神経発達を支援する教育	安全、思いやり、有意義な連携がとれる環境、理解しやすくて対話的な教育を提供する。教職員は子どもたちと頻繁に双方向的なやり取りをし、その結果、生徒のニーズに合った教育をすることができる。対話的な教育により、言語と行動を関連づけ、認知の歪みを修正し、主体性の構築を促す。
教室の管理	自己制御行動の学習、他者との肯定的なつながりの形成、自己肯定感の育成のためにポジティブな行動支援(Positive Behavior Support:以下PBS)や社会性と情動の学習プログラム(Social-Emotion Learning:以下SEL)の構成要素を用いる。応用行動分析を応用したPBSは子どもの問題を予測し、予防することに焦点をあてる。期待される行動は明確に定義され、子どもたちに示し、頻繁に再検討される。SELでは、感情の理解、行動の監視、共感と協働を育成する心の習慣を身に付けることを推進する。
方針と手続き	トラウマのある子どもたちに安全と成功を保証するための方針や手続きをすすめる。物理的環境の安全は最も重要である。また、いじめや情緒的 安全を脅かすことに対して子どもたちを守るだけでなく、守秘性を大切に する。規則、安全計画、コミュニケーション、地域医療機関との連携に関す る方針は、すべての子どもたちに有意義なものである。
規則	規則の方針は、起こりうる問題を予測し予防するよう立案する。教職員は一貫し、適切な方法で、全員に対して支援を行うための訓練を受ける。教職員は、行動の期待を明確に表現し、再検討を重ねる。学校は、子どもたちの自己覚知、モニタリング力を促し、協働的な方法で違反行為に対処する。
地域機関との連携	トラウマのある子どもたちや家族の精神保健のニーズに対処するために、地域の精神保健機関と公式に協働して連携をすすめる。連携により、社会-情動に対する介入の機会が増加し、リファール先の確保、教職員が訓練する場を提供することになる。

第二は、多くの研究により、幼少期のトラウマが学業などに及ぼす影響が明らかになってきたことである。幼少期のトラウマは表現力、言語、記憶、注意や実行機能といった子どもの認知機能全体の発達に影響を与える。PTSD 患者はトラウマ記憶を甦らせたとき、感情、性欲、食欲、睡眠など原始的な欲求を司る大脳辺縁系の活動が優位になり、理性や合理性の機能を果たす前頭前野の制御が効かなくなり冷静な判断がしにくくなることが明らかにされている [23][24]。

子どもの脳は発達期にあるため、トラウマ的な出来事の認知能力や言語化能力が発達段階により異なり、症状の表出方法も異なる(表 2)。言語能力が未発達である年少児の場合、トラウマは身体症状や行動上の問題として表出されやすい。このようなトラウマ体験による心身の症状は適切なケアが施されないと、学習の遅れ、友だち関係のトラブル、不登校といった派生的な問題が生じやすくなる[26]。また、派生的な問題である頻回な欠席や問題行動による退席は、教育を受ける機会を失わせ、結果として学力低下が生じることも明らかにされている[16]。このように、トラウマ体験をした子どもは学業や社会性において重大な影響を受ける。

表 2. 年齢別トラウマの子どもへの主な影響
(Child Trauma Toolkit for Educators[25]をもとに作成)

	就学前	小学生	中学生	高校生
身体面	身体的な不調(頭痛、腹痛、胸痛、些細な怪我や痛みなど)の訴えの増加 睡眠の問題(入眠困難、悪夢など) → 食欲の低下 →			
行動面	不機嫌 攻撃的、反抗的、対人面でのトラブル、衝動的でリスクの高い行動の増加 刺激(身体接触、強烈な光、突発的な動きやけたたましい音など)への過剰な反応 トラウマとなる出来事の再現(遊びや絵の中で) 出来事の詳細についての言及 出来事について何度も言及 「死」への質問 「死」や「死ぬこと」への反芻や言及、記述(メモや絵を含む) 退行(赤ちゃん返り、夜尿、トイレトレーニングの問題) 学業の低下 → 発達の遅れ 出来事を思い出す場所の回避 → 他者への不信感、他者や活動の回避 → 明確な理由のない欠席 長期欠席 →			
精神面	分離不安(養育者や先生など) 様々な対象への漠然とした不安や恐れ 自分や他者の安全についての過度な心配 再び出来事が起こることへの不安 仕返しへの恐れ、復讐心 → 集中力の低下、不注意 → ぼんやりする 刺激への反応の鈍さ → 感情麻痺 → 落ち着きのなさ 過活動 →			

近年、長期的、反復的にトラウマに曝された複雑性 PTSD が脳に与える影響も分かっている。身体的虐待、性的虐待、暴言、両親間の DV 暴露といった虐待の形式を問わず、小児期の虐待は脳の容積や髄鞘化が変容する[27][28][29][30]。また、その変容は虐待の内容により異なる。身体的虐待では、感情や理性に関与する右前頭前野内側部の容積が平均 19.1%減少し、実行機能に関与する右前帯状回の容積が 16.9%、物事の認知に関与する左前頭前野背外側部の容積が 14.5%減少していることが示された。暴言では、聴覚野の一部である左上側頭回灰白質の容積が 14.1%も有意に増加していた。性的虐待や DV 暴露では視覚野で有意な容積減少が認められた。こういった虐待の影響は深刻で長期にわたり、成人になるまで累積していく。そして、行動上や精神面での影響だけではなく、脳や他の生物学的なシステムにも影響を与えることが明らかになってきている[31]。

第三は、トラウマや神経科学研究の知見により、子どもの問題行動に対する新しい理解の仕方や適切な関わり方がもたらされたことである。生徒の破壊的行動に対する今までの理解の仕方は、生徒の背景や行動のメカニズムを理解することよりも生徒の反抗的な態度

の側面が強調されがちであった。場合によっては、極端な罰が与えられ、子どもは元々持っている周囲への不信感が強化されることになる。一方、これまでの研究から、トラウマがある生徒の破壊的行動のような周囲を困惑させる激しい行動は、トリガーにより大脳辺縁系が優位に活発になり過覚醒状態に陥っていると理解することができる。そうすると、対応としては単に厳しい罰を与えるのではなく、むしろ大脳辺縁系の活動を抑制するようなリラクゼーションやタイムアウトなどの活動を取り入れるという方法を選択することが期待される。

また、トラウマと大きく関連のあるアタッチメントの観点から、養育者との関係で適切な養育を受けると、アタッチメントが形成され、「社会性」、「社会的報酬システム」、「非言語的メッセージを読み取る力」、「社会の一員であるという意識」、「対人葛藤を調整し、向社会的行動と防衛行動のバランスを取るシステム」の発達を促すことが示唆されている[32]。教職員がトラウマによる影響を理解し適切に関わると、先生と子どもとの間につながりが育まれ、最終的に子どもは学校に対してアタッチメントを感じるようになる。そして、学校に対する所属意識や学校の皆が自分に好意を持っているということが分かるようになる[33]。子ども達が自他に対する認識を再構築できるように計画し、安全感のある環境を学校で提供することは、子どもの早期のアタッチメントの欠落を補う役割を果たすことになる[34]。

子どもを取り巻く大人たちが、このような理解に基づいて適切なかかわりがなされることによって、子どもたちの回復が促進し、二次外傷を受けることが少なくなる。

IV. ト라우マに対応する

TIS は、全教職員を対象にした専門性を高める研修を行わなければならない[7]。この研修では、トラウマ体験から生じる児童生徒の問題に対する共通理解、トラウマインフォームドアプローチへの合意形成、組織全体に対してトラウマインフォームドアプローチを組み込むために有益な態度、信念、行動を生み出すことを目的とする[35]。TIS を導入する、あるいは導入している組織が、データに基づき判断し意思決定する際には、組織のアセスメントが必須になり、そのためのアセスメントツールが開発されている。特にトラウマインフォームドケアに関する態度(the Attitudes Related to Trauma-Informed Care : 以下ARTIC) 尺度は、福祉分野、教育分野それぞれの領域に対して 45 項目の ARTIC-45、35 項目の ARTIC-35、10 項目の ARTIC-10 の計 6 種類と豊富に種類がある。ARTIC-45 は「問題行動/症状の根本原因」、「問題行動に対する教職員の対応」、「職務行動上の教職員」、「仕事における教職員の自己効力感」、「職務への教職員の対応」の 5 つの中心的な下位尺度に加えて、「TIC の個人的支援」、「TIC に対する学校全体の支援」の 2 つの補助下位尺度の計 7 つの下位尺度により構成されている。対象は、TIC が実施され始めている組織や機関である。ARTIC-35 は補助下位尺度を除く 5 つの中心的な下位尺度で構成され、TIC が実施されていない組織や機関で用いられる。ARTIC-10 は 5 つの中心的な下位尺度から抜粋された項目から構成され、TIC が実施され始めている／実施されていない組織や機関でも用いることができる。ARTIC は TIC を実施するうえでの準備性や障壁、職場の文化におけるトラウマインフォームドの程度や導入することによる変化の程度を確認するためのベースラインなどが調査できる[6]

トラウマに曝露した生徒のニーズに対応する方法として、子どもがどのようなトラウマ体験をし、それにどのような反応をしているのかアセスメントすることが提唱されている

[12]。アセスメントを行うことで、早期に様々なトラウマの悪影響のリスクを同定したり、介入することが可能になり、生徒の精神健康や教育的進展に有益である[36]。アメリカ国立子どもトラウマティックストレス・ネットワーク(National Child Traumatic Stress Network : NCTSN)の HP 内にトラウマに関連する心理尺度のデータベースがあり、検索できるようになっている。わが国では、Pynoos ら[37]による、DSM-IV 版 UCLA 外傷後ストレス障害インデックス(UCLA PTSD index for DSM-IV)の日本語版が兵庫県こころのケアセンターにより作成されている。これは自記式質問紙で、国際的にもっとも用いられている評価尺度である

また、低学年の子どもに自己報告式の質問紙を施行する場合には、質問項目の理解にばらつきがあるため、実施には個々人の理解度への配慮が期待される[36]。例えば、各質問項目を教職員が読み上げながら、“暴力という言葉の意味を知っていますか”というように言葉や具体的な場面をより具体的に丁寧に伝える。このような工夫を加えることでより精度の高いデータが収集できるようになる。

V. 学校に TIS 導入する際のフレームワーク

学校に TIS を導入するうえで、学校全体における積極的行動介入および支援 (School-Wide Positive Behavioral Interventions and Supports : 以下, SWPBIS) のフレームワークを用いることが提唱されている[35]。SWPBIS は、先述した PBS のアプローチを個別支援ではなく、学校における行動問題に学校全体で多層的に行うものである[38]。SWPBIS の特徴は、①エビデンスベースの実践としての生徒の支援、②集中度が増す支援の階層構成、③データに基づく問題解決のフレームワークを用いた支援決定、④生徒の反応を評価するための決定ルールと持続的な修正、⑤フレームワークを着実に実践し、それが持続しているかの確認、⑥生徒のニーズを早期に同定の 6 つが挙げられている[39]。SWPBIS のフレームワークは一般的に対象者が異なる 3 層構造から成り、介入の強度は第 1 層から低、中、高のレベルで上がっていく。高い層の対象者ほどニーズが特定化され、より専門的な介入が実施される。この SWPBIS のフレームワークを学校のトラウマインフォームドに適応させたのが図 1 である。

第 1 層(Universal)であるユニバーサルな学校・学級規模の介入は、すべての生徒を対象にする。この層では、ポジティブな教育的風土の促進や逆境的環境の低減、SEL の社会的問題解決やコーピングスキルを含むポジティブな適応的なスキルを育成していく。実施者はトラウマに関する知識、予防、軽減、改善のためのスキルや方略がある教職員となる。第 2 層以降は、より専門性の高い介入を提供するため、トラウマに詳しい専門的な精神保健の職員との協働が必要となる。第 2 層(Targeted)では 高リスク群が対象となる。この層では対象者にトラウマの兆候や影響を理解するための心理教育、ソーシャルサポートシステムの促進、自己制御スキルを強化していく。第 3 層(Select)では第 2 層よりもさらに高いニーズのある少数の生徒を対象にする。この層ではみんなを囲い込むケア(Wrap-around care)、コミュニティーを基盤にしたサービス、認知行動療法(cognitive behavioral therapy : 以下 CBT)を行う。特に CBT はトラウマ関連のストレスに対するエビデンスベースの治療のゴールドスタンダードと言われ、時間限定でスキルを教えることに焦点をあてるだけでなく、行動志向的、集団に適応できるため学校に有益である[35]。

エビデンスのあるトラウマ関連の CBT では、個人とその家族に向けたトラウマフォーカスト認知行動療法(Trauma-Focused Cognitive Behavioral Therapy)や集団に向けたトラ

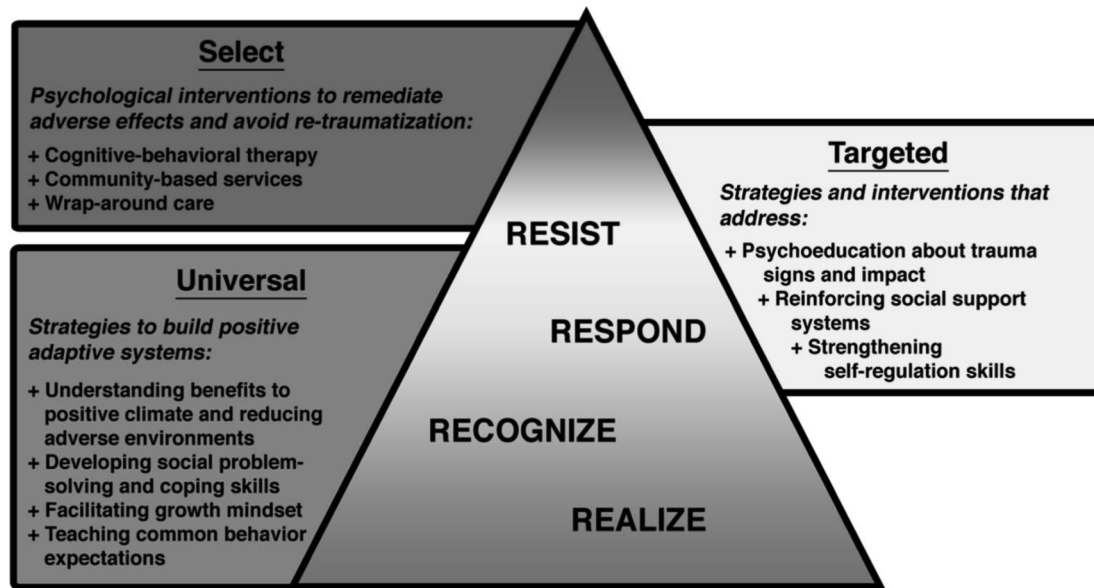


図1. トraumainフォームドスクールにおける多層的支援のフレームワーク [35]

ウマに対する認知行動療法(Cognitive Behavioral Intervention for Trauma in Schools : 以下 CBITS)などがある。

CBITS は小学5年生から高校3年生を対象として実施され、そのCBITSをベースに中学生向けに作成したものにトラウマを受けた生徒のための支援(Support for Students Exposed to Trauma : 以下 SSET)がある。SSET は小学4年生から実施可能とされており、マニュアルは邦訳されている[40]。さらに小学生向けに開発されたのがバウンスバック(Bounce Back : 以下 BB)である[41]。BB は4~7人の生徒の小集団で週1回の計10回行う集団セッション、3回行う親セッション、3回行う個人セッションにより構成されている。集団セッションのテーマと内容は以下のようになる。

【集団セッションのテーマと内容】

<セッション1>

- ・テーマ：治療への期待、導入、心理教育
- ・内容：プログラムについての説明。グループのルール、守秘義務の確認。トラウマ曝露の出現率と一般的な不安反応の心理教育。個々人の目標の確認。

<セッション2>

- ・テーマ：治療原理、感情、ポジティブな行動、一般的な反応をノーマライズする
- ・内容：CBT のトライアングル、治療原理の紹介。感情を把握し命名する方法、ストレスやトラウマへの一般的な反応を教える。気分がよくなる物事を見つける。

<セッション3>

- ・テーマ：身体感覚（心理的覚醒）とリラクセーションの練習
- ・内容：感情温度計の説明。緊張したとき、身体に何が起きるか話し合いし、CBT のトライアングルの復習。腹式呼吸、筋弛緩法により、リラクセーションの練習。

<セッション4>

- ・テーマ：役に立つ考え方をを使う
- ・内容：思考の捉え方、思考・感情・行動の関連について説明。役に立つ思考や勇気づけ思考の意義を理解出来るように導く。

<セッション 5>

- ・テーマ：私ははしごをすることができる(現実曝露階層表)
- ・内容：回避についてアナロジーを用い説明。不安階層表の最上位を埋める。感情と不安階層表の関係を説明。次回のセッションまでに実行可能な不安階層表の最下位の項目を決める。

<セッション 6>

- ・テーマ：コーピングスキルを復習する
- ・内容：CBT トライアングルの復習。感情、思考、行動について学んだことを振り返る。次回までに実行可能な不安階層表の項目を決める。

<セッション 7>

- ・テーマ：ソーシャルサポートと問題解決法
- ・内容：絵本やワークシートを用い信頼している他者とのつながりを理解する。感情温度計が上昇しているときにできることを検討。次回までに実行可能な不安階層表の項目を決める。

<セッション 8>

- ・テーマ：問題解決法を練習する
- ・内容：実際生活の問題をノーマライズし、ロールプレイについて説明する。気持ちの温度計が上昇しているときにすることのリストを使いながら、問題解決のためのロールプレイをする。

<セッション 9>

- ・テーマ：復習、不安階層表の確認、再発防止
- ・内容：今までのセッションの鍵概念・技法の振り返り。次回までにする不安階層表の項目を決める。次回行う統合プロジェクト（今までに練習したこと、使えるツール、成長したことなどを発表）の計画を全員で立てる。

<セッション 10>

- ・テーマ：卒業/お祝い
- ・内容：統合プロジェクトを実施する。これまでの進歩を祝う。

VI. 考察

本稿では米国において展開されている TIS の概要について述べてきた。最後に本邦の現状を述べて、TIS を導入する意義や問題点を考えていく。

上述したように米国においては、1990 年代半ばから ACE の研究が行われており、データの蓄積がある。本邦における ACE 研究は 20 歳以上の一般人約 2400 名を対象にした大規模のもの[42]、少年院在院性を対象としたもの[43][44]などがある。これらの研究から、一般人の 32%が少なくとも 1 つの逆境的体験を経験しており逆境体験の数が増加するにつれて精神障害の発症率が高まること[42]、少年院在院性は身体的虐待、心理的虐待、ネグレクトなどの虐待が対照群と比較して男子は約 4 倍～30 倍程[43]、女子は約 6 倍～40 倍程高いことが報告されている[44]。

いじめ研究では、小学生、中学生のいじめ内容の最多は、「冷やかしかからかい、悪口や

脅し文句、嫌なことを言われる」の 60%、次に「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたかれたり、蹴られたりする」の約 20%と多くの生徒が何かしらのいじめ体験を経験している[45]。いじめと症状の関連に関しては、いじめ被害に遭った男子の 27.6%、女子の 20.5%が PTSD を発症し、その中でもいじめの加害と被害の両方を経験した子どもは、より深刻な症状を示す[46]。また、いじめ体験は幼少時に虐待を受けるのと同程度に、広範囲で長期に渡り続く[47]。いじめの影響はいじめの傍観者も心理的な苦痛を与え、時間の経過とともに被害者と同等の心理的苦痛を抱くことも分かっている[48]。

米国ほど ACE 研究は盛んではないが、本邦でも、逆境体験をしている子どもたちが多く存在し、これらの体験が精神上、行動上に影響を与えていることが示唆されている。今後、データがさらに蓄積されることで多くの人によりトラウマの悪影響を理解し、関心が高まるのではないかと考えられる。

TIS では、教職員がトラウマの理解をすることが大きな役割を果たすため、大学の教員養成段階や教職員の研修に組み込むことが欠かせない。精神医療に目を向けると、本邦における未成年の精神疾患による受診者数は、2002 年の 9 万 5 千人から、2014 年では 20 万人を超えている[49]。また、2002～2010 年の 9 年間で 6～12 歳における ADHD 治療薬と抗精神病薬の処方件数が増加し、13～18 歳においては、それに加え、抗うつ薬の処方件数も増加している[50]。一方で、精神保健面の治療を必要としながらも、未だサービスにつながない児童生徒も多く存在している可能性は大きく、子ども達のメンタルヘルスの問題に対して学校という場が果たす役割はさらに大きくなると推測される。しかしながら、昨今、教職員の長時間労働の報道に代表されるように、教職員の現状は日々の業務に追われ、TIS のような新しい分野まで手が回りにくいと考えられる。その中で TIS に関しては学校内でスクールカウンセラー(以下 SC)が中心的役割を担っていく方が教職員の負担が少ない形で展開しやすいと考えられる。こういった中、文部科学省により提唱されているチーム学校の構想[51]における SC の職務は、「不登校、いじめや暴力行為等問題行動、子供の貧困、児童虐待等の未然防止、早期発見および支援・対応等」とトラウマと関連する内容になっている。また、支援内容は児童生徒、保護者、教職員に対する個別のカウンセリング、情報収集、アセスメントなどだけでなく、学校全体にアセスメントや支援を行い、全ての児童生徒が安心した学校生活を送ることができる環境づくり等を行うことも求められている。個々の児童生徒のみならず学校全体を視野に入れ、すべての児童生徒が安心した学校生活を送ることができる環境づくりをも求められている点は、TIS の定義にも重なり合い、今後 SC がトラウマに関する知識技能を身につける必要性は高まってくると考えられる。

たとえチーム学校の考え方が導入されたとしてもいくつかの問題点はある。一点目は、専門家や専門機関の数の問題が挙げられる。SC を中心に教職員に向けた研修会を開いていくにしても、トラウマへの対応やアセスメントに関する知識や情報に詳しい SC は多いとは言えないのが現状である。この背景としては、本邦が米国に比べても SC を養成するトラウマに詳しい専門家やトラウマ関連専門機関のリソースが少ないのが要因の一つとして考えられる。今後、トラウマに詳しい専門家をいかに増やしていくか研修や教育のシステムを整備することは急務な課題といえる。

二点目は学校教育におけるエビデンスベースの取り組みである。米国では、PBIS の学校への普及や学校組織の構造の違いがあり、本邦よりもデータに基づいたアプローチに対して組織的に取り組みが進められている。エビデンスに基づいた判断はデータを全く使わないよりも主観的に陥らず、一定の質の水準が担保され、質のばらつきが少なくなると考え

られる。一方でデータを有効に扱うためには、ある程度のデータに関する知識や技能の習得が欠かせない。この機能を教職員が担うのかあるいはチーム学校のように専門家が担うのか学校内での役割分担の明確化が求められるようになるだろう。

本稿では TIS の概念を捉えるために理論の紹介に焦点を充てた。TIS は組織的な展開が必要だけでなく、個々の学校のニーズに合わせた形で展開されており、マニュアルだけで導入するのは難しいと推測される。実際どのように現場で微調整を加えながら実践されているのか、今後、米国の実践内容から情報収集を継続していく必要があると考えられる。

参考文献

- [1] 石井美緒.(2014). ト라우マインフォームドケア(トラウマを念頭に置いて臨むケア). 精神看護 , 1, 92-93.
- [2] 厚生労働省.(2016). 平成 27 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値) <<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html>>(2016 年 10 月 7 日アクセス)
- [3] 文部科学省.(2016). 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/1363297_01_1.pdf>(2016 年 10 月 7 日アクセス)
- [4] 文部科学省国立教育政策研究所.(2013). 「いじめ追跡調査 2010-2012」.< https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-2010-2012.pdf>(2016 年 10 月 11 日アクセス)
- [5] 文部科学省.(2016). 「次世代の学校指導体制の在り方について (中間まとめ)」<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/hensei/003/_icsFiles/afieldfile/2016/05/13/1370047_1_01.pdf>(2016 年 10 月 11 日アクセス)
- [6] Baker, C .N., Brown, S. M., Wilcox ,P, D., Overstreet, S., Arora , P. (2016). Development and Psychometric Evaluation of the Attitudes Related to Trauma-Informed Care (ARTIC) Scale. School Mental Health, 8, 61-76.
- [7] Substance Abuse and Mental Health Service(SAMHSA) .(2014). SAMHSA's concept of trauma and guidance for a trauma-informed approach. < <http://store.samhsa.gov/shin/content/SMA14-4884/SMA14-4884.pdf> > (2016 年 10 月 10 日アクセス)
- [8] Cuthbert, C., Seng, J. (2015). What is trauma informed care and why is it important?. In Seng, J. & Taylor, J. (Eds.) Trauma Informed Care in the Perinatal Period. (Protecting Children and Young People). Dunedin Academic Press, pp .13-23.
- [9] Cole, S.F., O'Brien, J.G., Gadd, M.G., Ristuccia, J., Wallace, D.L.,& Gregory, M. (2005).Helping traumatized children learn: Supportive school environments for children traumatized by family violence. Massachusetts Advocates for Children Trauma and Learning Policy Initiative.
- [10] Cole, S.F., Einser, A., Gregory , M., & Ristuccia, J.(2013). Helping traumatized children learn: Safe, supportive learning environments that benefit all children. Massachusetts Advocates for Children Trauma and Learning Policy Initiative.
- [11] Downey, L . (2007). Calmer classrooms: A guide to working with traumatized children. Child Safety Commisioner.< <http://www.acesconnection.com/g/aces-in-education/fileSendAction/fcType/5/fcOid/452934889391655998/fodoid/452934889391655997/Calmer%20Classrooms%20-%20A%20guide%20to%20working%20with>

- %20traumatised%20children.pdf>(2016年10月21日アクセス)
- [12] Overstreet, O., Chafouleas, S. M. (2016). Trauma-Informed School: Introduction to the Special Issue. *School Mental Health*, 8, 1-6.
- [13] Australian Childhood Foundation. (2013). Making SPACE for Learning Trauma Informed Practice in Schools. < <http://www.childhood.org.au/~media/Files/Fundraising%20files/Fundraising%20resource%20files/Making%20space%20for%20learning%20ACF.ashx> > (2016年10月21日アクセス)
- [14] U.S. Department of Education. (2016). Elementary and Secondary Education Act of 1965. < <http://www2.ed.gov/documents/essa-act-of-1965.pdf> > (2016年10月25日アクセス)
- [15] Stevens, J. E. (2012). Lincoln High School in Walla Walla, WA tries new approach to school discipline—Suspensions drop 85%.” ACEs too high <<https://acestoohigh.com/2012/04/23/lincoln-high-school-in-walla-walla-wa-tries-new-approach-to-school-discipline-expulsions-drop-85/>> (2016年10月25日アクセス)
- [16] Craig, S.E. (2016). Trauma-Sensitive Schools: Learning Communities Transforming Children's Lives, K-5. Teachers College Press.
- [17] Deanne, A.C., Leanne, S.H., & Robert, H. H. (2003). Building Positive Behavior Support Systems in Schools: Functional Behavioral Assessment. The Guilford Press. [野呂文行・大久保賢一・佐藤美幸・三田地真実 訳. (2013). スクールワイドPBS—学校全体で取り組むポジティブな行動支援. 二瓶社]
- [18] 渡辺弥生. (2013). スクールワイドの枠組みに関する介入. 山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生 編. 世界の学校予防教育 心身の健康と適応を守る各国の取り組み. 金子書房, pp. 90-107.
- [19] 中村有吾・瀧野揚三. (2015). トラウマインフォームド・ケアにおけるケアの概念と実際. 学校危機とメンタルケア, 7, 69-83.
- [20] Felitti, V. J., Anda, R.F., Nordenberg, D., Williamson, D.F., Spitz, A.M., Edwards, V., & Marks, J.S. (1998). Relationship of Childhood Abuse and Household Dysfunction to Many of the Leading Causes of Death in Adults The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study. *American Journal of Preventive Medicine*, 14(4), 245-258.
- [21] Perfect, M., Turley, M., Carlson, J.S., Yohannan, J., & Gilles, M.S. (2016). School-related outcomes of traumatic event exposure and traumatic stress symptoms in students: A systematic review of research from 1990 to 2015. *School Mental Health*, 8, 7-43.
- [22] 渡辺弥生. (2013). 学校危機予防教育の流れと展望 — アメリカでの取り組み —. 法政大学文学部紀要, 67, 57-69.
- [23] 友田明美. (2014). 脳科学から見た PTSD. 友田明美・杉山登志朗・谷池雅子編. 子どもの PTSD. 診断と治療社, pp. 94-101.
- [24] 越智啓太. (2015). PTSD と認知プロセス. 杉山崇・丹藤克也・越智啓太編. 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション. 北大路書房, pp. 79-94.
- [25] The National Child Traumatic Stress Network. (2008). Child Trauma Toolkit for Educators. < http://www.nctsn.org/sites/all/modules/pubdlcnt/pubdlcnt.php?file=/sites/default/files/assets/pdfs/Child_Trauma_Toolkit_Final.pdf&nid=84 >

- [26] 野坂裕子.(2014).犯罪による子どものトラウマ. 友田明美・杉山登志朗・谷池雅子編. 子どもの PTSD.診断と治療社,pp.61-67.
- [27] Tomoda,A.,Navalta, C.P., Polcari, A., Sadato,N.,Teicher,M.H.(2009).Childhood sexual abuse is associated with reduced gray matter volume in visual cortex of young women. *Biological Psychiatry* ,66,642-648.
- [28] Tomoda, A., Rabi, K., Sheu ,Y., Polcari,A., Teicher,M. H. (2009).Reduced prefrontal cortical gray matter volume in young adults exposed to harsh corporal punishment. *Neuroimage* ,47S2,T66-71.
- [29]Tomoda,A.,Sheu,Y.S.,Rabi,K.,Suzuki,H.,Navalta,C.P.,Polcari,A,Teicher,M.H.(2011). Exposure to parental verbal abuse is associated with increased gray matter volume in superior temporal gyrus. *Neuroimage*,54 S1,S280-S286.
- [30] Tomoda, A., Polcari, A., Anderson,C.M., Teicher,M.H.(2012). Reduced visual cortex gray matter volume and thickness in young adults who witnessed domestic violence during childhood. *PLoS One* ,7(12),e52528.doi:10.1371/journal.pone.0052528.
- [31] Petersen,A.,Joseph,J.(2013).New directions in child abuse and neglect.The National Academies Press.
- [32] Hughes, D.A.,Baylin, J. (2012). *Brain-Based Parenting: The neuroscience of caregiving for healthy attachment*. W.W. Norton.
- [33] Bergin, C., Bergin, D. (2009). Attachment in the classroom. *Educational Psychological Review*, 21, 141–170.
- [34] O'Connor,E., McCartney, K.(2007).Examining Teacher–Child Relationships and Achievement as Part of an Ecological Model of Development. *American Educational Research Journal*, 44(2), 340-369.
- [35] Chafouleas,S.M.,Johnson,A.H.,Overstreet.S.,&Santos,N.M.(2015).Toward a Blueprint for Trauma-Informed Service Delivery in Schools. *School Mental Health*,8,144-162.
- [36] Gonzalez,A., Monzon,N.,Solis,D.,Jaycox,L.,Langley,A.K.(2016) Trauma exposure in elementary school children: Description of screening procedures, level of exposure, and posttraumatic stress symptoms. *School Mental Health*, 8, 77–88.
- [37] Pynoos,R., Rodriguez,N., Steinberg, A., Stuber, M., & Frederick, C. (1998).The UCLA PTSD reaction index for DSM IV (Revision 1). Los Angeles: UCLA Trauma Psychiatry Program.
- [38] 枝廣和憲・松山康成.(2015).学校全体における積極的行動介入および支援の動向と実際ーイリノイ州 District15 公立中学校における取り組みを中心にー. 岡山大学教師教育開発センター紀要,5 ,35-43.
- [39] Sugai,G.,Horner,R.H.(2009).Responsiveness-to-Intervention and School-Wide Positive Behavior Supports: Integration of Multi-Tiered System Approaches. *Exceptionality*, 17(4),223-237.
- [40] Jaycox, L,H., Langley, A,K., Dean,K,L .(2012). Support for Students Exposed to Trauma(Japanese translation)<http://www.rand.org/content/dam/rand/pubs/technical_reports/2012/RAND_TR675z1.pdf>(2016 年 12 月 6 日アクセス)
- [41] Langley,A. K., Jaycox , L.H. (2015). Bounce Back Program Manual.<<https://>

- bouncebackprogram.org/resource-materials/3710/Manul_workbook_parent_sessions_bundle.pdf>(2016年12月6日アクセス)
- [42] 藤原武男・水木理恵子.(2012).子ども時代の逆境体験は精神障害を引き起こすか?.日本社会精神医学会雑誌, 21(4),526-534.
 - [43] 松浦直己・橋本俊顕・十一元三.(2007). 非行と小児期逆境体験及び不適切要因との関連についての検討ー少年院における ACE 質問紙を使用した実証的調査ー. 兵庫教育大学研究紀要, 30,215-223.
 - [44] 松浦直己・橋本俊顕.(2007).発達特性と不適切養育の相互作用に関する検討ー女子少年院在院者と一般高校生との比較調査よりー.鳴門教育大学情報教育ジャーナル,4,29-40.
 - [45] 文部科学省.(2016).平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf>(2016年12月6日アクセス)
 - [46] Idsoe,T.,Dyregrov,A., Idsoe,E.C.(2012).Bulling and PTSD Symptoms. Journal of Abnormal Child Psychology Child Psychol,40,901-911.
 - [47] Nicholas, C., Eric, R.(2007). School bullying : Do Adult Survivors perceive long-term Effects.Traumatology,13,16-26.
 - [48] Janson,G.R., Hazler,R.J.(2004).Trauma reactions of bystanders and victims to repetitive about experiences. Violence and Victims,19(2),239-255.
 - [49] 厚生労働省.(2014).平成 26(2014)患者調査の概況.<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/dl/kanja.pdf>>(2016年12月6日アクセス)
 - [50] 奥村泰之・藤田純一・松本俊彦.(2014).日本における子どもへの向精神薬処方を経年変化:2002年から2010年の社会医療診察行為別調査の活用.精神神経学雑誌,116(11),921-935.
 - [51] 文部科学省.(2017) 児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～(報告)<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/25/1381051_2.pdf>(2017年1月20日アクセス)

The Concept and Developmet of Trauma-Informed Care in Education

Yugo Nakamura^{*}, Yuri Kimura^{*}, Yozo Takino^{**}, Masahiro Iwakiri^{**},
Hironaga Ichitani^{***}

^{*}National Mental Support Center for School Crisis, counselor

^{**}National Mental Support Center for School Crisis

^{***}Ikeda High School Attached to Osaka Kyoiku University, counselor

In recent years, trauma informed schools(TIS) are becoming popular in the United States. It adapts trauma informed care to the field of education. It is a framework aiming at understanding and mitigating the adverse effects of trauma. In this paper, for the purpose of introducing this concept into Japan, we summarized the contents of the concept and examined the problem. The framework, SWPBIS is recommended. Its elements include "staff training and supervision", "instruction that supports neural development", "classroom management", "policies and procedures", "discipline" and "cooperation with community agencies". Finally, as a problem of introduction, we mainly examined the training of experts.

Keyword : Trauma-Informed School、SWPBIS、Bounce Back、Collaboration In School